

---

のは Scarlet&blue 先行公開、超ネタバレ番外編（ちゃんと本編掲載するから待っててね）

三月語

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは Scarlet & blue  
先行公開、超ネタバレ番外編（ちゃんと本編掲載するから待つて  
ね）

### 【ZPDF】

N4242S

### 【作者名】

三月語

### 【あらすじ】

この物語は、ある日を境に魔法の力に目覚めた優しき少年（青年）と彼を想い慕う少女達などが織り成す笑いあり恋あり嫉妬あり（？）な話・・・の先行公開版の番外編です。

一部壮絶なモノがありますが気にしないで下さい。

後、必ずしも毎回最新話として投稿する、といつ事は無いので、後書きに更新予定期を書いておきます。

**番外編 注意書き&原作外キャラ先行説明（前書き）**

今回は前置きみたいなモノだと思つてください。

## 番外編 注意書き&原作外キャラ先行説明

本編を「」覧になる前に、「」の小説について説明します。

この小説は、『作者が『魔法少女リリカルなのは Scarlet & Apple・blue』の本編を書いていたところ、何故か先に番外編の構図が出来上がってしまい、どうしようもできなくなつたために先行掲載した番外編だけの小説』です。

時系列は、A - SportableからStrikersのちょうど間、そしてStrikersの時期です（全部番外編として扱つております）。

区分としてはStrikersまでを（A）、Strikers以降を（S）とします。

元からラブコメ形式で展開されます。一部、キャラの設定がおかしくなっているところがありますが、そこは気にしないでください。また、タグ通り、R15は当たり前だと思っていてください。

また、この話は後に本編で改変されて掲載されます。あくまで一時凌ぎ的扱いで、生温かい目で見守つていてください。

次は、本編で出てくる、原作には登場しないキャラ、あるいは名前が改変されたキャラについての簡易的な説明です。

本編主人公、なのはたちに好かれているリア充人間。

本編では『守りたいものは絶対守る』が信念のカツコいい少年だが、ここではヘタレたりひつかき回されたりの不幸少年になつたりします。そして、デバイスはBLAZBLUEのラグナ&ジン仕様（知らない人は、ググつてね）。

ちなみに料理は自称『シャマルさんとほぼ同じ』。

スポーツ万能、と言われているが、本人、カナヅチ。

CV：柿原徹也（ドイツ生まれの日本人。本人曰く、『ジンは僕がキヤスティングされた時点でこうなつていることは大体予測できたはず』らしいです）

代表作：BLAZBLUE ジン＝キサラギ

魔法少女リリカルなのはシリーズ レヴァンティン、グラ  
ファイゼン（Tetsuya Kakihara名義で）

高町 星奈せな

元々『星光の殲滅者』。なのはの妹（的立ち位置）。直人大好き、完全に一途。だけど料理は超苦手。

CV：田村ゆかり（従兄弟に『三国無双』の馬超の中の人気がいます！ちなみに人見知りな所があるそうです）

代表作：魔法少女リリカルなのはシリーズ 高町なのは  
IS - インフィニット・ストラatos - 篠ノ之束

ライカ・T・ハラオウン（ライカは漢字で『雷華』と当てられています）

元々『雷刃の襲撃者』。フェイトの妹（的立ち位置）。

アホの子は健在。素直なのに・・・

CV：水樹奈々（皆さんご存じ水樹さんです。一度だけ『食わず嫌い王決定戦』に出てました）

代表作：魔法少女リリカルなのはシリーズ フェイト・T・ハラオ  
ウン

テイルズシリーズ コレット・ブルーネル

八神 間那<sup>あんな</sup>

元々『闇統べる王』。はやての妹（的立ち位置）。はやての『性格改善プログラム（製作者：リンディ・ハラオウン）』を受け、多少は性格が改善された（一人称が『我』から『私』に変わったくらい）。

直人に対して重症のツンデレテレ（ツン・デレ＝3・7）。多分一番変わった子かも。

CV：植田 佳奈（ぶるらじで画伯認定！本人曰くMだそうです。そして自分で認めるゲーマー！）

代表作：魔法少女リリカルなのはシリーズ ハ神はやて  
BLAZBLUE レイチェル・アルカード

## 番外編 注意書き&原作外キャラ先行説明（後書き）

次回は『夏だ！海だ！少女達の恋愛争奪戦だ！？（A）』で、本日（4／12）午後9時に更新します。

時期と内容が合っていない？

それは考えたら負けだと思つてます！

番外編 夏だ！海だ！少女たちの恋愛争奪戦だ！？（A）（前書き）

時期が違つことは気にしたら負けです！

番外編 夏だ！海だ！少女たちの恋愛争奪戦だ！？（A）

番外編 夏だ！海だ！少女たちの恋愛争奪戦だ！？

「うみだ！」

聖祥大付属小仲良しメンバー揃つて出かけた先は、海。保護者扱いで来たのは偶然休暇中だったリンディとシグナム、シャマル。

見えた瞬間、開口一番に叫んだのは、我らがアホの子、ライカ。

「ライカ、落ち着きなさい？」

「だつて海だよ！？落ち着いていられないんだよ！？はしゃいだつて仕方ないんだよ！？海だもん！！」

リンディが優しく諭すが、ライカはそんなことに聞く耳持てず。はしゃぐ理由をより興奮したようにまくし立てる。

「ライカ、少しは静かにできないのか！？」

「無理！？」

闇那が遂に痺れを切らせてライカに怒鳴るが、そのライカはすっぽ

り断ち切つた。

「貴様・・・私に向かって・・・！だから嫌だ、と言つた・・・」「闇那、ひょつとして海行きたくなかった？」

「ううつ・・・べ、別に、そういうわけじや・・・ないのだが・・・わ、私はその・・・なんだ、騒がしいのが・・・嫌いなだけだ・・・」

ついには握り拳がプルプル震えだした闇那に直人が聞く。

とたんに闇那は顔を真っ赤にしてどもりだし、最後には殆ど何を言つているのか聞こえないほど小さな声だつた。

11

「直人、大富豪しない？」

「大富豪？いいけど・・・いいの？僕、強いよ？」

バニングス家提供マイクロバスのお陰で殆どメンバーがそろい踏みな状況で、アリサが直人に大富豪で宣戦布告。

「これでもあたしは、大富豪30連勝の兵なのよ？たかをくくつて負けた時の言い訳、させないわよ～？」

「あ、なら私も。」

なのは、参戦。

「じゃあ、私も・・・」「

一私モヤニ一

フライト、すずか参戦。

「私も参加するよー」

はやても。

「私はいいです。直人と一緒にいられるだけで・・・」

「星奈ちゃん！」

「その二ヤリは止めて！？なんか裏がありそうで怖いんだけど！？」

なのは、焦る。理由としては、やっぱり直人を取られそうな気がしたから。

「そ、 そうだよー」というか、 星奈がやらないんだったら私やめとく

「ふえ、アモイト……？」

フュイト、なぜか離脱。

「フュイトちやん抜けるの！？」

「なんかいやな予感がするんだもん・・・」

嫌な予感＝星奈が直人とイチャイチャ・・・

「それはダメ！アリサちゃん、やつぱり私も抜けるー！

「直人、抜けないけど・・・？」

『やつぱりやる！』

「どうちなのよあんたたちは！..」

「あ、あはは・・・」

なのは・フュイト、はつきり言つて大迷惑かけっぱなし・・・

一方ハ神家メンバーは・・・

「な、なあはやて・・・」

「ヴィータ？どうしたん？」

「闇那が・・・怖いんだけど・・・」

「闇那が？」

「主はやて、私もヴィータと同じ意見です・・・なにかに切羽詰まつたかのような思いつめた表情で・・・」

「ちょお話してみよか？なんで切羽詰まつたんか分からんけど」

よつもないやん?」

「そり・・・ですね・・・」

そんな中、当の闇那はといふと・・・

「直人に水着を見せなければならないのか・・・？は、恥ずかしい・・・いや、でも・・・下手をしたら私は後れを取つてしまふ・・・しかし、でも・・・あの水着は・・・／／／」

海に出かけるその数日前、はやてこよつて無理やり水着を買わせられた闇那。

「・・・ヴィータ、シグナム、大丈夫やよ。水着でテンパつてるだけや。特に気にすることはないよ。」

「そう・・・なのかな？」

そへは見えませぬか……」

闇那、大慌てではやての口をふさぐ。

「おい闇那！はやての口を塞ぐな！」

「塞ぎたくもなるわ！ななな何を根拠に私がテンパつてるように  
みみみ見えるんだ！？」

「・・・闇那。」

「な、なんだ！？」

「・・・明らかに動搖してるのが誰にでもバレバレだ。」

「うぐつ・・・」

結局シグナムらに追いつめられる闇那であつた。

海岸

一  
お

ライカ、フリーズ。海を見て完全に止まつた。

卷之三

「水着・・・水着・・・やつぱり着なきやダメ・・・だよね・・・

なのは、フロイトは恥ずかしさで顔が真っ赤になつてゐる。

闇那は頭を抱えて蹲つていた。ちなみに顔を横にぶんぶんと振つて。

「……はやてちゃん、なんか皆、相羽君ノバつてませんか？」  
「仮にしたらいあかんと懸つよシャーマン。シャーマンとやつれ、だつて……なあ？」  
「……ねえ？」

「・・・だよねえ？」

恋愛関係全く無し組一数名が完全に一致していた。意見が。

そんな中星奈は・・・

「直人。水着・・・着てみたのですが・・・どうでしょうか？」

真っ先に水着に着替えていた。

彼女が来ていた水着は黒いセパレートタイプ。明らかに『大人らしさ』を強調していた。

「似・・・合つてると・・・思つ、よ?//」

「そ、そうですか・・・似合つて・・・ますか・・・//」

何となく桃色な雰囲気が出来上がっているのに気づいた面々は・・・

「・・・フエイトちゃん・・・」

「なのは・・・」

『着替えてこよつーー!』

一人は一気に更衣室へ・・・

「恥ずかしい恥ずかしい恥ずか（「」）

闇那はまだ同じ行動を取つていた。

そしてその他面々は・・・

「・・・はやて。」

「・・・なんや？」

「何なのかしら、今、すつごいあの一人がむかつくんだけど・・・  
「奇遇やね・・・。私も今、ものすつごいむかついとるんよ・・・」

「ま、まあまあ二人とも・・・。落ち着いて・・・？ね？」

『これが落ち着いていられるわけ（ないやろ／ないでしょ）！？』

「そりかなあ・・・？」

「ま、まさか・・・」

「すずか、あんたも勝ち組！？」

「そ、そういうわけじゃないんだけど・・・」

『・・・大人だ・・・』

〇〇になつてゐる者・・・

「・・・シグナム・・・」

「何も言つな・・・ヴィータ・・・」

「・・・ところでなのはたちは？」

「ものすごい形相で更衣室へ走つていつたのを見たぞ。」

「・・・相当切羽詰まつてんな・・・」

「みたいだな・・・」

などとしみじみとしてくる者・・・

「・・・必死だな・・・」

「そうみたいだねえ・・・」

ただ傍観してゐるだけの者がいた。

「海に来た、なんて言つても泳げないんだよね・・・」

あの後、闇那を除いた水着品評会が直人の意思関係なく行われ、誰が一番なのか、というのを詰問されていました。

ちなみにあの一人の水着は、なのはは星奈の水着と同じタイプ、白色版。フロイトは黒いレオタードのようなタイプだつた。

「直人くん、まさか泳げんとか?」

「そのまさか、なんだよね・・・」

「あはは・・・でも、こつぽ つとするのもありかもしれんね。」

「そうだね・・・」

なんて一人でボケ つとしていたら・・・

直人 !ビーチバレー やるー !

アリサが直人を呼んだ。

「・・・なんか、忙しいかも。」

「がんばってやー。」

まだ足が治つてないはやてを残し、直人はビーチバレーをしに行つ

た。

しかし、そこで乙女の戦いが勃発した。

ちなみに、メンバーは・・・

なのは・フェイト・アリサ・すずか・星奈・直人。

「じゃあ、直人とすずかは別々にするわね。この一人が同じチーム  
だつたら勝てないかもしれないし。」

『それでお願い（します）！』

「あんたら、そこでそんなチームワークばっちらりな発言は控えてよ  
・

ちなみに、意見がぴったり合つた彼女たちの頭の中は・・・

直人がすずかと同じメンバーになる可能性がある＝そこにアリサが  
入ってしまう可能性がある

＝私が直人（くん）と同じメンバーになれなくなる！？

だった。

「じゃあ、じゃんけんで・・・」

『最初はグー！じゃんけんぽん！あいこでしょつ！あいこでしょつ！』

アリサを置いて三人が突然じゃんけんを始めてしました。

「・・・ちよつとー？あんたら早すぎるわよー！」

『あいこでしょつ！あいこでしょつ！あいこでしょつ！あいこでしょつ！あいこでしょつ！』

「そして決まらないの！？どんだけ偶然が続くのよー！はあ・・・。だったら、直人枠一つにしどこつかしら・・・？」

アリサがそう言つた瞬間、更に白熱しました。

「もう一回最初からやるよ つー！」

「いいよー私が絶対勝つもん！」

「勝つのは私です！あなたたちは辛酸を舐めていればいいんです！」

『最初はグー！じゃんけんぽんつ！あいこでしょつ！あいこでしょつ！』

さらに激化したじゃんけん。無駄にスペック高い・・・

そんな三人を放置して、チームの大体な感覚を話す残つた三人。

「とりあえずなのはが入った方はフォローに追われるわね・・・。  
はつきり言えば、直人とすずかが同じチームでもなのはが入つたら  
負ける可能性もあるわね・・・」

「なのはちゃん、運動苦手だもんね・・・」

「でも、今のはちゃんは分からないと思つた。『少しでも直人  
くんにいいとこ見せたい!』って思つてるかもだから、違つて見え  
るかもしないよ?」

話題の中心は専らなのはだつた。

「勝つた つ！」

『負けた・・・』

そしてじやんけんの方も決着がついたようだ。

勝つたのはなのは。

「ようやく決着ついたみたいね。とりあえず今とのこりは、なのは  
が私と同じ、つてだけよ。」

「ウソ・・・」

「やつた!」

「そうしてもらわないと怒りますよ・・・?」

「あなたの場合、怒る怒らないの区別が分からぬから怖いのよ・・・

・

それで、メンバーの一強別れは勝つた方が『なのは・アリサ』を入手する、という形になった。

そこで直人にもすずかにも両方のプレッシャーがかかっていた。

直人側にはなのはからの

「勝つて勝つて勝つて勝つて勝つて（ｒｙ）

という必勝願掛けが呪詛のように聞こえ、すずかには・・・

「負けないで負けないで負けないで（ｒｙ）

「負けたら承知しませんよ・・・？」

フェイトの強烈な願掛けと星奈の凶悪な脅しがかかっていた。

結果・・・

直人：チヨキ

すずか：パー

「やつた つ！」

「わわつ！な、なのはちゃん！？」

勝つたことが判つた瞬間、なのはが直人に抱きついたのだった。

一方、フェイントと星奈は・・・

「ふう・・・」  
「むー・・・」

頬を膨らませていた。

そして、ビーチバレーが始まつた。

そんな頃、闇那は・・・

「はーい、恥ずかしがりさんの到着ですよー」

そうシャマルが言いながら連れて来たのは・・・

《・・・》

全身バスタオルでぐるぐる巻きにし、髪の毛だけが辛うじて出ているだけの『誰か』だった。

「わあっ！？ ちょ、ちょ、シャマル！？ だ、誰やこのバスタオルお化け！？」

「あ、闇那じゃないのか！？」

「闇那だとは思いますが・・・ 判別が・・・ 難しいですね・・・」

三人がびっくりして いたら・・・

《は、はやて・・・、さすがにこれは・・・恥ずかしそうなもん・・・》

《》

くぐもつた声で声が聞こえた。闇那の。

「は、恥ずかしがることはないと思うよ。もつとどーんと、思い切つていつたらどうや?」

『だ、だつたら、なんでちょっと引いた声が聞こえたんだ?』

「そら・・・なあ・・・?」

「・・・だな・・・」

「・・・しようがないかと・・・」

全員が声をそろえた理由。

それは、異形ともとれる闇那の現在の姿だった。

『だからなんで引いているんだ!?』

「そんなバスタオルお化けがいきなり目の前に現れたら誰だつて引くわ!ちょっと待つとり、直人くんすぐ呼んできてもらうから!」

『ま、待て!ま、まだ、こ、こ心の準備がままだ・・・』

「じゃ、呼んでくる!」

「頼んだで、ヴィータ。」

『ちよつ・・・まつ、むぎゅうつ!-!』

バスタオルお化け(闇那)は何故ここまで来れたのかは謎だつたらく  
らいだつたため、あつさり・・・にけた。

「大丈夫か・・・?」

『大丈夫に見えるのか・・・!もし見えるのだつたら貴様の目は

節穴といふことに・・・』

「リングティさん? もつと厳しい性格修正プログラムってあります?」

【もつと厳しい性格修正プログラムかしら? ちょっと待つて・・・】

『何でもないぞ! 何でもないから厳しいのは止めてくれはやで! !』

ビーチバレーの試合場バトルフィールド

全員が絶句していた。

何故かといふと・・・

「・・・なのは、あんた、そんな運動神経良かつたっけ?」

なのはが今までのなのはを鑑みると別人のよつた動きをしていった。

「今の私は一味違つんだよ！運動神経悪い私じゃなくなつたんだから…！」

「じゃあ今から海で泳ぐ？ビーチバレー止めて…」

「それは無理かも…」

「やっぱり直人効果だ！」

現状：なのはが直人効果で変わつていたお陰か拮抗。

「さあ…ラストゲームよ！」

とアリサが意氣込んだ瞬間だった。

お、いたいた！直人！

ヴィータが直人を呼びに来た。

瞬間、なのは、フェイト、星奈の顔が一気に変わった。

「ヴィータちゃん、何？」

「とりあえず来い！お前らも来れば面白いもん見れるかもしねー

ぞ！？

「面白いもん？・・・そつにえればそつから闇那見ないわね・・・」

「闇那ちゃんの水着かな？」

「だつたら・・・面白いわね・・・・・・」

「あ、アリサ・・・ちゃん・・・？」

アリサが発した笑い声に怯えるなのは

「よしみんな！ちよつとビーチバレー休んで見に行くわよーーーー！」

「そ、それはちょっと・・・かわいそうな気が・・・」

「今まであんなにどれだけ偉そうな目をされたのか忘れたのー！？その報復よ報復ーーー！」

『え

・・・』

そんなこんなでヴィータに連れられた直人の後を追う面々であった。

そんな中ライカは・・・

「・・・あれ？」

沖に大分流されていた。

「・・・みんながいるといつてどっちだっけ？」

「はやて！ 閻那が水着の！」披露だつて！？」「

「そりやよー。 閻那が渋つとるけどな。」

「あの・・・はやてけやん？ 閻那けやんつて・・・そここのバスタオルお化け？」

「そやよ？」

すずかが差したのは、未だに砂浜に倒れて芋虫みたいにくねくねしていたバスタオルお化けこと閻那だった。

「閻那ー？ 直人くん来たよー？」

『なつ、直人！？なぜ来た！？』（ ちゃんとシャマルが立たせてあります）

「いやね？ ヴィータちゃんが来いって引っ張つていったから・・・」

「閻那ー？ 見せたらどうだ？ 愛しの直人に水着をさ。」

『い、い、愛しの！？ そ、そんなこと言われてもだなーま、まだこのこつ、心の準備がででできてない！ むむ無理なものは無理だ！ そそそなことよりヴィータ！ 愛しのとかいいいい言づなー！』

バスタオル越しなのにも拘らず、超焦つているのが分かる動きをしていた。

「・・・闇那？」

『な、なんだ！？』

「いつまでもそうやってたら私たちで直人を独占しますよ？」

『そっ、それは許せん！』というがダメだ！直人は私なのだ！！』

「だつたら早く水着のお披露目したら・・・？」

『くう・・・ええ

い！』

覚悟を決めたようで、闇那は身体にまいていたバスタオルを一気に取つた。

中にいた闇那は、闇那にしてみればオレンジ色でフリルがあしらわれた派手な感じが漂つているタンキニタイプの水着だつたが・・・

何故か、いや、自然な位に似合つていた。

「笑いたければ・・・笑うがいい・・・どうせ、似合つてないのだから・・・」

「・・・いや、似合つてると思つよ・・・？」

「・・・羨ましいくらいに似合つてるよ・・・」

「なぜ・・・そんなに合つるもの・・・」

落ち込む面々がいたが・・・

「なあ直人くん？闇那の水着、似合つるとと思わん？」

「う、うん・・・、似合つてると思つよ・・・？可愛いし・・・」

「かつ、かわ、可愛い！？私が！？かわ、かわ・・・」

闇那、完全に顔が真っ赤になつていた。

「あ、闇那・・・ちゃん？」

「ひやわああああああああああああああああああああ・・・

一気に海へと逃げていく闇那であつた。

その時、一瞬だけ彼女が水上走りを生身でしていたという奇跡をしていた。

「・・・あの闇那が・・・ねえ？」

「そうだね・・・。闇那ちゃんつてあんなに恥ずかしがりだつたんだね・・・」

その後、闇那がしばらく戻つてこなかつたりライカが迷子になつたり・・・など、色々なトラブルはあつたものの、思い思いに海を堪能して、夕方になつた。

帰る前、ただ一人海を見ていた直人。

「あの・・・直人くん？」

「ん？どうしたの、なのはちゃん？」

なのはが直人の所に一人で來た。

「（だ、大丈夫だよね・・・？誰もいないよね・・・？聞かれてないよね・・・？）な、直人くん、ら、来週・・・い、一緒にお出かけしない！？」

「お、お出かけ？」

唐突ななのはのお出かけのお誘い。

「ダメ……かな？」

「……良いよ？」

「ホント！？」

直人がOKを出した時、なのはの顔が今までにないほど幸せなものになつた。

「じゃ、じゃあ、明日、わ、わた、私、直人くんの家まで行くね！」  
「へ、うん……（こんななのはぢゃん初めて見たかも……）」

この時なのはは浮かれ過ぎていた。

（やつた　　！直人くんとデートだ　　…ど、ど  
ど、どうしょ、どうしょ！？何も起こらないよね！？大丈夫だよね  
！？）

と。

何者かがそんな二人を憎らしげに見ていた、ということを気付けな  
いでいた……

番外編 夏だ！海だ！少女たちの恋愛争奪戦だ！？（A）（後書き）

次回は時間軸ががらりと代わりS t Sになります。というか、（A）（S）（A）と順繰りで更新します。

で、タイトルは『ヘルズファング破廉恥事件簿 File 1 (S)』で4／13、午後9時に更新する予定です。

## 番外編 アリサプロテュース・『なのは告白&キス大作戦』！(A) (前書き)

待つてる人はそういう気もしますが、お待たせしました。

今回は某学園コメディーの某遊園地が出ますが、脈絡は無いので。

番外編 アリサプロトユース・『なのは告白&キス大作戦』！(A)

番外編 アリサプロトユース・『なのは告白&キス大作戦』！

なのはが直人をデートに誘つたその翌日。

「なのは？どうしたんですか？いつにもなく顔が緩けきつてますよ？」

「気のせいだよお～」

星奈に言われるほど、なのはは顔が緩けきつていた。

心の中は穏やかではなく、

(直人くんとデート デート はにゃ～、どうにこいつかな～、はうう～)

かなり浮かれきつていた。

一方の星奈は・・・

（顔がにやけてますし、心なしかスキップをしているような・・・？何かうれしいことがあったんでしょつか・・・？）

推測を立てていた。

昼休み・・・

「なのは・・・?」  
「うなんだけど・・・」

「ふえ〜? なんでもないよお〜?えへへえ〜」

「昨日何かいいことがあったのかな・・・?」

屋上でいつも三人がお昼を食べていた時のことである。

「・・・なのは、正直に言いなさい? 昨日、何があったの?」  
「直人くん関係のことなら誰にも言わないよ?」  
「・・・ホントに言わない?」  
『言わない。』

二人が断言した時、なのはは一回ほどきょよろとして、昨日の夕方、思い切った決断をしたことを顔を赤くしながら告げた。

「・・・なのは。」  
「な、なにかな？」  
「・・・この際告白しちゃいなさい。」  
「ちやいなさい！」  
「ふえつ！？ふええつ！？」  
「いや、いや、いや、告白がー？」

なのは、アリサの提案に思いきり動搖していた。

「大丈夫よ！嫌いって訳ないでしょ？それにフェイトたちに先越されたくないでしょ？キス。」

「え、えしゃー！？」

そして声が裏返った。

「なのはあ・・・、あんた、さすがにそりがで奥手じゃないでしょ？」

「き、き、キス・・・キス・・・」

「・・・奥手みたい・・・だね。」

苦笑いでテンパつたように『キス』を連呼するのは見るすずかであった。

「なのは、なのはー」で懸こ垂つ畠畠しなむー」だつたら雰囲氣も良いかもだしーそれに・・・」ヒョウヒョウヒョウヒョウ・・・

う、う、うん！が、が、頑張る！

一方、教室・・・

「・・・星奈、フヨイト。緊急事態だ。」

「どうしたの？闇那・・・」

「・・・まさか、なのはが朝上機嫌だつた理由が分かつたんですか

？」

星奈の雰囲気が大きく変わる。嫉妬のオーラ全開だ。

「ああ・・・。昨日はやてに言われて直人たちを探しに行つた時だ。

「何があつたの！？」

「早く教えなさい！」

「・・・で、デートの約束をしていた！直人もOKを出していた！」

「・・・お話・・・かな？」

「お話じゃダメです・・・。お仕置きです・・・」

「ああ・・・、徹底的にな・・・」

徹底的な密談が組まれていた・・・



そして週末。

「じゃ、じゃあ、行つてきますーー！」

「こつてらつしゃい。なのは、楽しんできてね 恭也は私たちで押  
されておくから、あんまり遅くならなくてひたすらゆっくらね？」

「う、うんーー！」

なのはは彼女の母・桃子に見送られて家を出た。

「・・・ふふっ。あの子も恋する女の子になつちやつたか。

そんなんのはを見守りながらも、くすりと笑つ桃子であった・・・

そして、なのはが玄関を出た瞬間、だった。

「あ、なのはちゃん。おはよ。」

「えっ！あ、え、う、その、お、おはよ！（な、直人くん…？なん  
で！？）」

玄関先に直人がいてなのはの緊張は一気にピークに達した。

「「めんね？ホントならなのはちゃんが家に来るって話だけど、待  
たせてたら悪いかな、って思つたんだ。」

「そ、そ、う、な、ん、だ…？」

「じゃ、行こ？」

直人がなのはに手を差し伸べる。

「う、うん…？／／／

なのはも恭しく手を伸ばし、直人の手を握る。

そして、街に向かつて歩き出した。

その頃、星奈は・・・

「なのは・・・！抜け駆けなんて、させませんよ・・・！？」

入口から怨嗟の田で一人を（というかなのはを）見ていた。

・・・が。

「星奈？お店のお手伝い頼めない？」

「うへへへへへ・・・・」

桃子が絶賛妬み中の星奈に手伝いを頼んでいたが、星奈には聞こえていない。

「星奈・・・・？」

「へへへ！？」

そして、突然感じた恐怖に慌てて後ろに振り向いたら、魔王がいた。

「お手伝い・・・・頼めない・・・・？」

「は、はい！？」

とぼとぼと翠屋に入つていく星奈。

(フェイト、闇那、後は頼みました。・。・。くすん・。・。)

その頃フェイトは・。・。

「フェイト、大人しくしててね？」

「・・・ぐすん。」

フエイトは未だにベッドに寝ていた。いや、ベッドから出でて出でられない状態になっていた。

「なのはがあ・・・なのはがあ・・・ナホツナホツ！」

そう、フエイトは昨日、風邪をこじらせてしまったのだ。きっかけは『なのはと直人のデートを入浴中に考え過ぎて長風呂してしまった』からだ。

ちなみに熱は38・4°。

一応ライカが抑え役となつて看病中。

「トートの」と氣になるかもしれないけど、今はゆつくつ休んで風治さなきやだよ？」

「つっ・・・」

フエイトはじれつたようにしていた。

(闇那・・・、星奈・・・、ごめんね・・・)

フェイントはもう離脱が決定した星奈とまだ状況が分かっていない闇  
那に後を託した・・・

そして闇那は  
・・・

「なのはあ・・・・・貴様あ・・・・・抜け駆けなどひよ・・・・・つ・・・・・」

電信柱をめきめきと音が鳴るくじりに握りしめていた。

そう、彼女だけが唯一何もなく尾行が出来たのだ。

「直人は・・・私の・・・って何を言つてゐるんだ私は！？だつ、だが、それは事実であつて、だが正面切つて言つのは・・・」

そして、電信柱が悲鳴を上げるくじりこまでひびが入つていた。

が。

「あら闇那ちゃん、いいところ!」

「つ・・・・なんだ、シャマルか・・・」

シャマルが闇那を見かけたのだ。手には賣い物袋。

「ちょっとお願いがあるんですけど、お荷物、持つてもいりませんか?」「

「今私は忙しいのだ!!そんなことに付き合つてゐる暇はない!『お手伝いしないと』『飯抜きだ』つてはやでちやんが言つてしまつたよ?」

「うぐっ・・・」

結局闇那も戦線離脱を余儀なくする羽目になってしまった・・・

(フヨイト・・・星奈・・・、後は頼んだぞ・・・・)

どちらも既に戦線離脱をしてしまった二人に、後を託してしまった・  
・

(はう・・・、直人くんと手、握りちゃつてるよあー・・・／＼)

なのはは完全に緊張していた。といづか、恥ずかしさも粗まつてしまつている。

そして、あの田のアリサの言葉がそれにより拍車をかけてしまつていた。

『告白しなさい! そのまま勢いに乗つてキスしちゃえばそれで勝つたも回然なのよ!』

(きょ、今日が一番の勝負・・・)、告白できなかつたらどうしよ・・・お母さんに色々お願ひした意味が無くなつたやうよー!ー!ー!ー!ー!)

なのはが母に頼んだ」と、それは簡単にいえば『おめかし』だ。

いつもの服ではなく、可愛らしさを表に出した真つ白なワンピースだ。

「えっと・・・、どうよ?」

いつの間にか駅についており、直人はなのはの顔を覗き込むように聞いてみた。

「あ、あの、あのね!？」、「ここにこつー？」

なのはがテンパリながら見せたのは、如月グランドパークのチケット。

「如月グランドパーク? うん、いいよ! 僕行つてみたかつたんだ!」  
「ほつ、ホント! ?」

ちなみになのはがこのチケットを持つているかと言つと・・・

金曜日にアリサから貰つたのだ。月曜日『ここに行け』と言つておいて火曜日にチケットの存在に気付き、水曜日に入手、木曜日に届いて、それからのことだった。

ちなみになのはの今回のデートは発案・企画・準備すべてをアリサが行つたことから『アリサプロデュース』と命名された(なのは・アリサ・すずかの中で)。

二人は電車に乗り込み、如月グランドパークへと向かつた。

「えつと?』『プレミアムチケットのお客様はウェーディング体験が出  
来ます』?へ?。『

入園前、近くの幟を見たら「そつこつ」とが書いてあることに気付く直人。

なのはは、といふと・・・

「う、ウェディング・・・体験・・・／／／

ウェディング体験という言葉に顔を真っ赤にしていた。

直人は自分のチケットを見てみたら・・・

『プレミアム優待チケット』と書いてあった。

「・・・できるみたいだよ?」

「う、うえ、うえでい、ウェディング体験できるのー?」

「う、うん・・・

そしてチケットを見せて許可をもらい、中に入った瞬間だった。

「プレミアムチケットのお客様ですね?」

「あ、はい。そうですが・・・」

「・・・／／／

声をかけられた。

「プレミアムチケットのお客様限定で写真撮影のサービスを行つております。カップル来場記念として、また一人の思い出の一枚として、どうですか？」

「お、お、お願いしましゅ！／＼／＼

「お、お願ひします・・・」

なのはが物凄い勢いで頬みこみ（そして噛んで）、直人がそののはを抑えるように頼んだ。

「はい、では・・・そつちの男の子は好きにしててください。そつちの女の子は男の子の腕に抱きついちゃつてください。何なら、体に抱きついちゃつてもいいですよ？」

『つーーー』

スタッフの強い押しに驚く一人だが、なのはは意を決したよう  
で・・・

きゅ・・・

「な、なのはちゃん！？」

「ちょ、ちょつとだけ・・・」いつわせて・・・？／＼／＼

なのはが直人の体に抱きついていた。

ちなみにお互いに見つめ合っていた時にスタッフが一枚撮っていた。

「では取りまーす。3、2、1。」

パシャッ！

「では、これが出来上がった写真です。今まま仲良く居てくださいね？」

「は、はい。ありがとうございました。」

スタッフから写真を受け取り、直人は礼を言つ。

なのはは・・・

出来上がった写真を見て顔を赤くして俯き気味になつてゐた。

写真の中の一人は幸せなカップルと言つても過言じやないような雰囲気だつた。

その後一人は色々と楽しんでいた。

直人が『どこに行きたい?』と聞き、テンパつたなのはが『あ、あそこ!』と言つて指を指したのがお化け屋敷。

その様子は  
・  
・  
・

ヌウ

一  
わづ  
・  
・  
・  
・  
・

ケタケタケタ・・・

「ひにゃああああああああつーー！」

— ゆく出来てるなあ ・・・ このかいコツ。

『この～い～み～は～る～で～お～く～べ～き～か～・・・（某ハーレム漫画のアニメ版の巫女（こよみかここんぐ先輩）風に）』

「あうあうあう・・・」  
「さ、さすがに怖いかも・・・」

どこか怖がつてなさそうな直人と今にも泣きそうな顔になつたなの

はが見られたり・・・

・・・て翔子！…これは誤解だ！…

「許さない・・・」

と追つて追われてのカップルを見てなのはが更に怯えたのが見られたりしていた。

また、変なカップルを目撃したり、着ぐるみが着ぐるみに制裁を加えていたり、なのはが口 コンな男に絡まれた所を直人が子供らしからぬ威嚇で、ビビらせて逃げさせ、更になのはが惚れこんだ、という光景があった。

そしてその日の昼だった。

急展開が起きたのは  
・  
・  
・

「そろそろお腹空いたね。」

「へ、うん・・・／／／」

ちょうどお皿も近づいてきたことから、そろそろ皿食を取りうつす  
る一人。

ちなみになのははお弁当を作つてきていな。否、作ることが出来  
なかつた。理由は星奈。

どうしようかと直人が思案していたら・・・

『（ピンポンパンポーン・・・）えー、お客様にお知らせです。え  
ー、本日、プレミアムチケット来場者のお客様限定で、特別ランチ  
を『』用意させていただきました・・・』

こんなアナウンスが聞こえてきた（なんとなくやる気がなさそうだ  
ったのは氣のせい）。

「特別ランチだってーなのはもちろん、行ってみよ?」

「うーうんー」

「じつはひがんなのはも慣れた(?)のか、いつも通りになってしま  
た。」

～アナウンスで言っていたレストラン～

「ほわあ・・・  
「ふ、普通じゃ食べれないものだよね・・・」れ・・・

目の前に並べられた料理に驚きを隠せない一人。

小学生でも分かる。それほど豪華なのだ。

『い、 いただきます・・・』

いつものように食べ始める・・・が。

(ど、 どじょ・・・)  
(た、 食べちゃうのが・・・もつたいないかも・・・)

そこまで言えるくらいだ。

そうしてもつたいなさげに食べていた頃だった。

『本日は』来場、誠にありがとうございますー本日はここに幸せな  
カッフルがいらっしゃいますーー』

「へつ？」

「ほえ？」

突然正面のステージがライトアップし、司会者（？）がそんなことを言っていた。

『そんなお一人さんは・・・』の方たちですーー』

その瞬間、一人にスポットライトが当てられた。

「んむ？」

「ふえつーー？」

直人は何故か落ち着いた状況で、なのはは動搖していた。

仕方ない、一斉にスポットライトが当てられた方に視線が向いたからだ。

「そ、こちらへどーぞー。」

「あ、あの、えと！？」

「キャンペーんの一環で す。」

「ほえ！？ふえつ！？はええ！？」

スタッフに連れられてステージへ上がった一人。

そのままセットされた机に座られた。

『え、入場した時に行つていただきました事前アンケートに元す  
いた、一人の信頼を確かめる質問です。質問は全部で三つ。その全  
部に答えられれば・・・ウェディング体験をプレゼント っ！！』

『つ！／＼／＼』

ウェディング体験と聞き、一気に顔が赤くなつた一人。

『では第一問！お互いの誕生日はいつ？あ、お手元のフリップボ  
ードに、記入ください。』

言われてお互いに書き始める。知らないわけもない誕生日、間違え  
る訳もなく・・・

【<sup>なのは</sup>4月2日】  
【（直人）3月15日】

『・・・正解で すっ！―では続いて第二問―お一人が初めて出会つた場所は何処！？お手元のフリップボードにビデオー。』

これも書き始める。なのはがちょっと悩んでいたが・・・

【（一人）『喫茶翠屋』のお密さんとして（僕／直人くん）が来た】

『・・・これも正解でーす！―では第三問！ラスト問題です！『相手が考える、自分の良いところ』とはー？』

「えつ！？」

「しょ、しょんこや」とわからんにゃいー！／＼／＼

なのは、カミカミな状況に。

しかし、結局は書き始めていく。

そして、出た答えは・・・

【<sup>なのは</sup>自分の意見をはつきりと言えること】

【（直人）誰にでも優しいこと】

『・・・せ かいで

すつ！』

すつ！おめでと

ビデオー

そして、一斉に起立する拍手。

『では、お着替えでーす。』

そして、二人はスタッフに連れられて別室へと向かって行った。

「一方・・・（ここからしばらくアリサ＆すずか側の三人称でお送りします）」

「なのはちゃん、大丈夫かなあ・・・？」

「心配じやなかつたら私たちがこんなところに来ないわよ・・・」

二人が心配になつて見に来ていたアリサとすずか。ちなみにチケットは一応プレミアム。

ちなみに高町夫妻の依頼でもあるが、とにかく心配だつたのだ。

「とりあえずあのクイズは全問正解だつたみたいだから、後は告白とキスだけね・・・」

「なのはちゃん、頑張れ！」

ちなみにカメラを持ってきていたのは仕方のなかつたことである・・・

『では、幸せを掴んだお一人の』入場で  
婿から!』

すつ……まずは花

司会者の合図と共に入ってきたのは直人。

「へー……結構に合ってるじゃない。とりあえず[写真][写真]…  
「す」いね……あ、じゃあ、なのはけやんはどうなってるんだ  
ろ?」

「さあ? とりあえず直人の写真は撮つておいたけど。」

直人の写真だけを何枚か撮つておいて（携帯でも撮影済み）、なのはを待つ。

『では、花嫁の登場です！！！』

そして、なのはが入つて来た時・・・

まるで時が止まつたかのような状態になつた。

「な、なのは・・・なの？」  
「きれーい・・・」

そのなのはは、ウェディングドレスを着てはいたが、髪を下ろしていたりなど、雰囲気ががらりと変わつていた。

「あ、アリサちゃん写真写真ー。（ひそひそ）」「そ、そうだつた！忘れるこだつた！（ひそひそ）」「

慌ててカメラを構え、写真を撮り始めるアリサ。

ちなみに激写しているわけは、高町夫妻のため。

『では・・・ウホーティング・・・ところとでー告白しちゃつたりしてくださいーー』

その一瞬、アリサはこう思つた。『同会者、ナイスーー』と。

「・・・なのは・・・ちゃん・・・／／／

「あ、あのね・・・？直人くん・・・。その・・・えと・・・」

「行けー告つちゃえーなのはーファイトーー（ひそひそ）」

「なのはちゃん、頑張れ・・・（ひそひそ）」

「あの、ね？わ、わた、わた、私、なつ、直人くんのこと我が・・・

す・・・す・・・好きなの！」

「な、なのはちゃん・・・／＼／＼

「ま、まだ直人くんの答えはもらえないがたつていいくけど・・・、私は直人くんのことが好きだから・・・えと、その・・・」

「なのはちゃん？」

（あつあつ～～～！は、恥ずかしくなつちやつた～～～！？ビ、ビ  
エミエミウコモ！？・・・も、もつエミエミでもなつちやえ～～～！？・・・）

そして勢い任せに直人の首に腕を回し・・・

キスをした・・・

「よ つし！…よくやつたわなのはー（ひやひや）」  
（な、なのはちゃん大胆・・・／＼／＼）

「・・・／＼／＼

「」、これが・・・私の気持ち・・・。ぜ、絶対に直人くん以外の人を好きにならないっていう、私の気持ちだよ・・・！／＼／＼

なのはの決意の告白を聞き、キスをされて茫然としていた直人だったが・・・

「な、なのはちゃん、ぼ、僕は・・・まだ・・・、」、答えを言つことはできないけど・・・その・・・」  
「う、うん・・・／＼／＼

「い、いつか、ちゃんと答えを言つかりー！それまで、ま、待ついてくれますかー！？」

俯きながら、だが、しつかりとした『何れ必ず答えを言つ』ヒーツ決意を告げた。。

「・・・はーつー・」

なのはも顔を赤くしてはいたが、満面の笑みで返事をした。

「・・・ねえアリサちゃん・・・」

「どうしたのすずか・・・ってすずかー?..びついたのよそんなに泣  
いやつて!?」

「こんな気持ちなかなあ・・・?子どもが結婚しちゃう時のお父  
さんの気持ちつて・・・ぐす・・・」

「これ、皆に見せたらどんな反応するのかしら・・・」

そう言つてアリサが見つめていたのはなのはが直人にキスをした瞬  
間の一枚を取つたデータ。

その夜。

アリサラが先に帰つてきていた為に、高町夫妻は直人となのはのウエディング体験の写真を娘に黙つてみせてもらつていたが・・・案の定、士郎は号泣。桃子もどこか嬉しそうにしていた。

そしてなのはが帰つてきて、二人のデートは無事に幕を閉じた。

ちなみに、今夜の高町家の夕飯に、赤飯が出されていたのはご愛敬。

（直人くん、あの時は勢いで言っちゃったけど、私は本当に直人くんが好き。答えが大人になつてからでも、その答えが私にとつて聞きたくない答えになつちゃつても、私はずっと、直人くんを想い続けるからね。）

後日。

「なのはあ・・・」  
「抜け駆けとは・・・」  
「卑怯だぞ・・・」  
「ぬつ、抜け駆けじやないもんつー」というか抜け駆け禁止なんて聞いてないよー?」

なのはが三人に捕まつて尋問を受けていた。

ちなみにフロイトだけ涙田。その田は『あることあることあることあること』と訴えていた。

「お仕置きですね・・・」  
「お仕置きだな・・・こや、仕置きとこつば葉は最早生温こぞ星  
奈・・・」

なのはの悲鳴が聖祥大付屬小にこだました・・・

## 番外編 アリサプロデュース・『なのは告白&キス大作戦』！（A）（後書き）

次回は『ヘルズファング破廉恥事件簿 File2 (S)』で、更新は4/22の予定です。

番外編 ヘルズファンケ破廉恥事件簿 File 1(S) (前書き)

今回・・・いや、この『事件簿シリーズ(仮)』はちと口かつたりします。

そして嫉妬します。

・・・女って怖い。

今回は直人となのはが模擬戦しておりますが・・・? (突然バトルから始まるのは気にしない方向で)

## 番外編 ヘルズファング破廉恥事件簿 File 1(S)

番外編 ヘルズファング破廉恥事件簿 File 1

訓練用フィールドでは、なのはと直人が模擬戦をしていた。

(決定打が・・・)  
(当たらない・・・)

お互に決定打が当たらなくて焦っていた。

なのはは直人の『腕』によつて攻撃が防がれてしまう。

直人は接近しようにも避けられたりしてしまつて攻撃が出来ない。

拮抗状態が続いて数分が経つていた。

(相手の・・・なのはちゃんの予想の斜め上を行く行動をしないと  
当たられない・・・かも!)  
(直人くん、魔法を使う魔力、私の魔力で補つてるとからなあ・・・)

「激戦だな・・・」

「・・・（そわそわ・・・そわそわ・・・）」

そんな二人の激戦を見て素直な感想を言つغاイータと、全く落ち着きがなくそわそわするフュイト。

「フュイト？ どうしたの？ 落ち着きないけど・・・」

「どうちを応援しようか迷つてるんだよ・・・」

「こいついうときは決まっているだろ？ 私は直人を応援するぞ！ 『当然だらう！』？」

「いや・・・フュイトは好きな人と友達のどうちを応援しようか迷つてるんだよ・・・」

「私も直人を応援します。・・・妻として当然ですか。／＼／＼

「そいつー妻違うだろー！」

こんなやり取りがフィールド外で繰り広げられていた・・・（ちなみにフォワード陣は休暇のため外出していた）

「これで・・・決着を付けるーー『ブラック・カイン』ーー」  
「つー・・・あれば・・・危ないかも・・・」

直人がブラッド・カインを発動させたことによつて危機感を覚えたなのは。

そこから来るある大技は既に自分の目で見て、結果を知つてゐため、下手に食らうわけにはいかない。

が、その大技の問題点もすでに分かつてゐるつもりだつた。

「ディバイ  
「ヘルズ・・・ファング！」

そして、収束砲を撃とうとして杖を前に構えた瞬間、想定外の行動で直人が攻撃をしてきたのだった。

「えつ！？そつち！？えつ、あつ、ど、どうしよ、もう避けるしか・  
・・」

パニクつてゐる時に直人が完全に接近、もう避けられない。

(当てるのはお腹！それか肩！弱めで当てるー)

そんな目的で突っ込んでいき、掌を伸ばした・・・

ふ  
に。  
。

が<sup>。</sup>

卷之二

「 」 ！ ！ ！ ！ ！ ！

せりあつた

直人がなのはの胸を驚きにしたのだ。

同時にチャージされていた魔力が『ぼすん』という可愛らしい音とともに消失した。

フィールド外で見ていたヴィータは、完全に顔を真っ赤にしていた。

「あわわわわ・・・」

そして、ライカは怯えていた。

「・・・なのは・・・？」

「何をしているんだ貴様は・・・？」

「あなたは変態なんですか？それとも痴女ですか？何なんですか？」

その横の黒々しい負のオーラに。

そして、ある事に気付いた。

「あれ？悪いのってなのはじやなくて直人じやない？」

『悪いのはなのは（だ／）です（ーー）』

「ひいいいいいつーー！」

そしてライカは言いくるめられた。言葉の圧力に・・・

「…………／＼／＼

なのは、ふらふらとゅうくり地上に降りていく。

直人も慌てて追いかける。

「！」「めんなのはちゃん！！わざとじゃなくて、ホントはお腹か肩を狙つてたんだけど・・・ホントごめん！」

地面に降りたなのははへなへなと力抜けしたようにへたり込んだ。

「・・・直人くん・・・」

「はつ、はいい！？？」

直人の声が上ずつた。俯きがちななのはに半ば怯えている。

「いきなりなんて・・・ダメだよお・・・。まだ心の準備できてないのにい・・・直人くんのえつちい・・・／＼／＼

「えつ！？そつち！？」

怒られるか砲撃食らうかぽかぽか殴られるか、そのどれかを覚悟していただけに、田の前で胸を隠して恥ずかしがつているなのはを見

て直人は焦った。

ちなみになのはがへたり込んでいるため、直人からすれば涙目上目使いなのだが。

・・・あああああ・・・・・!

「えつ！？」

「ふえつ！？」

そして、奥から怒りMAX！！な女性陣が走ってきた・・・

「直人、直人！何もされてないよね！？大丈夫だよね！？さつきのは直人からやったわけじゃないよね！？悪いのはなのはなんだよね！？」

「ちょ、まつ、ぐび、というか、かた、そんなに、ふらな、いで、く・・・くあ wせd r f t g yふじk l p・・・」

フェイドが必死の形相で直人に詰問（あくまで悪いのはなのはだという考え方で）し、

「なのは・・・あなた、自分からやったのですか・・・？」

「そ、そんなわけないよ！！ホントに避けられなかつたんだつて！」

「嘘をつくな！あの動きは避ける気がなかつたようなものだつたぞ

！――」

「そ、そんなんあ～！！」

『さあ、覚悟して（ください／もりあつか）・・・』

「ね、待つて！事故なんだつて！お仕置きは止めて

つ～？』

数分後、模擬戦用のフィールドで大爆発が起きたとな・・・

番外編 ヘルズファンケ破廉恥事件簿 Final 1(S) (後書き)

次回は『アリサプロテュース・』なのは告白&キス大作戦！（A）  
『』で、予定は4／20のつもりです。

『夏だ～』で先述したとおり割り込み掲載になりますのでご注意を。

感想など、お待ちしております（荒らしへ厳禁）。

事件簿シリーズ第二弾です。

遅くなりましたが、どうぞ。

## 番外編 ヘルズファング破廉恥事件簿 File 2 (S)

番外編 ヘルズファング破廉恥事件簿 File 2

なのはの事故（周りはなのはの故意、なのはと直人は事故だと主張し合っている）数日後。

今度はフェイトVS直人が行われていた。

今回はフォワードに参考用の戦いを見せる目的で、なのはと星奈が一緒にいる。

「じゃあ・・・行くよー」

「いつでも。負けないからね？」

簡単に言葉を交わした直後、二人同時に地を蹴った。

「はつ、速い！？動いたのが見えなかつた！！」

「ち、違います！直人は後ろに下がつたんです！前に傾いてから消えたのでそう見えたように錯覚されたんです！」

「！」これが・・・執務官同士の本気の戦い・・・！」

キャロはキャロでポカーンとしてしまつてゐる。

「まさか、『管理局の紅き死神』と『金色の女神』の戦いをこんな間近で見れるなんて思わなかつたけど・・・」

「ところでなのはさん、直人のことなんですけど・・・」

「ん？ デリしたのエリオ？」

なのはがエリオの質問を受け付け、エリオが思つたことを口にする。

「直人さんつて、武器、二つも持つてゐるんですね？右の腰に細い剣と、背中のホルダーに通してあるだけの大きい剣と・・・それってどういうことなんですか？」

「ああ、直人くんの武器のこと？簡単に説明すれば、なんだけど、直人くんつて管理局史上初の『ツインデバイサー』なんだ。だから、武器を二つ持つてゐるわけ。」

「追加の説明ですが、直人のデバイス属性は『闇』と『氷』です。『闇』を司るデバイスはレアスキルのそれと全く同じ扱いの能力を持つてゐるんです。」

「ありがと、星奈ちゃん。」

「なのは、説明不足にも程がありますよ？このこともちやんと言わ

ないと・・・」

「こやはは、ごめんね？」

なのはが頬を申し訳なさそうに搔いている時、フォワード陣は食い入るように模擬戦を見ていた。

フェイドが押した、と思えば、返すように直人が攻める。その逆も然り。

正に一進一退の攻防戦が繰り広げられていた。

「そういえば直人さんって魔法めちゃくちゃに撃つてますよね？魔力切れ、起こさないんですか？」

「スバル、いいところに気付きましたね？直人ですが、実は『殆ど無尽蔵の魔力を持っている』と言つても過言じやないんです。」

「えと・・・どういふことですか？」

スバルが頭の上に疑問符を浮かべている。

「煙がはれたら直人の方をよく見てみてください。戦い始めた時と様子が違つてますから。」

星奈に言われ、煙がはれた瞬間に直人を見たら、一斉に・・・

『何あれ！？』

とおつかなびっくりな様子。

「あれが直人の『無尽蔵の魔力』の答えなんです。直人の『闇』のデバイスは、作用効果で『魔力吸収能力』があるんです。はやての『蒐集』能力とはまた違った、『相手の魔力を魔力によって喰らい、己の魔法の発動用として還元する』という能力なんです。」

その説明を聞いた時、フォワード陣は全員一致の意見を持つた。

（な、直人さんが敵じゃなくて良かつた・・・）

と。

そして、直人が『ブラッド・カイン』を展開し、またそれを説明、などを繰り返していた時、事件は起きた。

「デッドスパイク・ショット！」

「つー！」

直人が放った『デッドスパイク・ショット』を避け、地上すれすれに降りたフェイト。

「（今だ！今度こそ事故を起さない！）ヘルズファングー！」

「あああああああああつー！」

お互に叫びを始めた瞬間

『ゴクッ・・・』

フォワード陣が一斉に固唾を飲んだ。

が。

デビュアンツー！

『つーーーーーーー』

「ふひやんー！」

『つーーーーーーー』

突然の爆発に、フヨイトの悲鳴（？）が聞こえ、焦る面々。

特になのはは・・・

（も、もしかして・・・！？もしかして・・・！？！？）

なのはが先陣切って訓練場に行き、それに付随するように星奈、フ

オワード陣が向かつた。

「フヒイトちや・・・・・ナミツナミツー・フヒイトちやん、だいじょ・・・

最後まで言い切る前になのはは黙り込んでしまつた。

星奈、  
絶叫。

「・・・スバル、分かってるわね？」  
「・・・うん。」

スバルにすぐに指示を出すティアナ。

「えつ？えつ！？何があつたんですか！？」  
「えとあの、なんで目を隠すんですか？」

エリオとキャロの幼いコンビの目を隠した。

彼女らの目の前にあつた光景とは・・・

|   |   |
|---|---|
| Γ | — |
| • | • |
| • | • |
| • | • |
| • | • |
| • | • |
| • | • |
| • | • |
| • | • |
| / | / |
| / | / |
| / | / |
| Γ | — |

倒れた拍子でキスし合つており、まだ闇魔力を持つている右手がフ  
エイトの胸を鷺掴みにしていた・・・

なお、フェイトは足を曲げておらず、直人に完全に乗り上げてる形になっていた。

「……嘵嘵/……10# 3……?

「何を・・・しているのですか・・?」

۱۷۷

た。二人の怨嗟を込めた一言でフェイントも直人も一気に飛び退いて離れ

「えと、ね？その、事故……だから、ね？ワザとじやないって分  
かってくれる……よね……？／／／」  
「そ、そうそう！ふえ、フェイトちゃん、ごめん！」「  
べ、べべ別にいいいよ！？む、むしろ嬉しかつたし！恥ずかし  
かつたけど……」

そんな感じで大テンパリで話していたら・・・

「フェイトちゃん・・・少し・・・お話しよつか・・・」

「いえ、お話では生温いです・・・。お仕置きしましょうか・・・」

「えつ！？待つて！？さつき事故つて言つてなかつたつけ！？」

フェイト、必死に弁明。

「フェイトちゃん、私の時に事故つて言つても信じてくれなかつた  
んだもん！！」

なのはが叫んだ時、フォワードに疑問符が浮かんだ。

『事故つて何だ？』

と。

結局、その後・・・

「スタートライトお・・・」  
「ルシフェリオオン・・・」  
「スター ライトお・・・」  
「ルシフェリオオ ン・・・」

『プレイカ

「キヤ

「なんで僕まで

つ！』

！？』

『！』

二つの収束砲がフェイトに向かって放たれ、同時に巻き込まれて直人まで食らった・・・

余談だが、闇那にこの事がばれて、なのは・フェイト・星奈が説教を受けるという珍しい光景が見られた。

番外編 ヘルズファンケ破廉恥事件簿 File 2(S) (後書き)

次回は『番外編 私、料理下手を克服しますっ！（A）』で、更新日は・・・未定です。

更新の際に活動報告でお知らせします。

それと、割り込みなので更新しても最新のでは出できませんので。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4242s/>

魔法少女リリカルなのは Scarlet&blue 先行公開、超ネタバレ番外編（ち

2011年10月6日20時27分発行